

☆ 星新一の作品集 XIV

さまざまな迷路

さまざまな迷路
おかしな先祖

(星新一の作品集 XV)

印刷 昭和50年7月20日

発行 昭和50年7月25日

著 者 星 新一

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71

振 替 東京4ー808

電話 業務部 (03)266-5111 編集部 (03)266-5411

印刷所 株式会社 光 邦

製本所 株式会社 大進堂

© Shinichi Hoshi, 1975 Printed in Japan

定価 800円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

XI

☆ 星新一の作品集 XIV



さまざまな迷路
おかしな先祖
(星新一の作品集 XIV)

定価 800円

印刷 昭和50年7月20日

発行 昭和50年7月25日

著者 星 新一

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71

振替 東京4—808

電話 業務部 (03)266-5111 編集部 (03)266-5411

印刷所 株式会社 光 邦

製本所 株式会社 大進堂

© Shinichi Hoshi, 1975 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

さまざまな迷路

全 快

「このあいだから、なぜということもなく、自分に借金があるような気がしてならないのです。先生、どういうことでしょう」

ひとりの青年が病院へやってきて言った。神経科の医師はカルテを見ながらうなずく。

「借金がですか……」

「ぼくはこの一年のあいだに、新進の作曲家としての地位をきずいた。ヒット曲もいくつか作った。才能にめぐまれ、ガールフレンドにも不自由しない。それなのに、なぜこんな不景気な気分にとらわれるのか……」

「不景気な気分ですか。なるほど、そんな傾向がでてきましたか。よろしい、できうる限りの手当をして、かならず治療してさしあげます。さあ、そのベッドに横に……」

青年は横たわり、治療が進められた。だが、青年は叫ぶ。

「なんだか、変ですよ。借金のことか、ますます頭のなかで鮮明になってきます。一方、音楽へのインスピレーションが、びたりととまってしまった。ガールフレンドたちの名も顔も忘れてゆく……」

「それでいいですよ。あなたは一年前に、道でころんで頭をうち、記憶喪失になっていたのです。やっと正しい記憶がとり戻せたというわけです。治療のしがいがあった。おめでとうございます。うれしいでしょう」

青年は完全に過去の記憶をとり戻した。借金の山と、不美人の妻と、会社の金をつかいこんで逃げている身である自分のことを。

町人たち

「あなた、聞きましたか。浅野内匠頭あきのたけみのかみが殿中で吉良上野介きらこうすけのすけに切りかかり、やりそこなって切腹を命ぜられたとか……」

「聞いたとも。面白くなりそうですなあ。なるといい。かたき討ちに発展すべきだ」

「集団でのかたき討ちは、法で禁止ですよ」

「法なんか、なんです。おれたちは娯楽にうえてるんだ。おれたちはいつも武士にべこべこしている。その代償に、武士はあつということをやつて見せてくれるべきです」

「そば屋さん。あんた商売へたですねえ。きつと赤穂の浪士でしょう。ほら、どぎまぎした。かくさなくてもいいですよ。われわれはみな支持者です。期待してますよ。がん

ばって下さい。そうだ、わたしの知合いに、吉良家に出入りの商人がいます。こんど情報をもらつてきてあげますよ」

「うちには吉良邸の図面があつたはずだ。お貸ししますよ。派手におやんなさい。想像するだけでも、ぞくぞくするなあ」

「ぐずぐずしていると、吉良老人が死んじゃいますよ」

「とうとうやりましたなあ。胸がすつとしました。浪士たちはみな切腹だそうですね」

「法をおかしたのだから仕方ないでしょう。いさぎよいところがいいし、ひと区切りもつく。生きてられて威張られちゃかなわん」

「また、なんか起つてほしいですね……」

使 者

一台の円盤状の物体が飛来し、地球上に着陸する。人びとの見まもるなかでドアが開き、宇宙人がひとり、にこやかな表情と動作で出てくる。外見は地球人と似ている。みな緊張がほどける。

だが、つぎの瞬間、予想もしなかったことが起る。円盤が爆発し、宇宙人のからだは四散。もちろん即死。青ざめる関係者たち。

「なんということだ。この宇宙人の星のやつらは、事故だと信じてはくれまい。連絡の途絶で、われわれにやられたと判断するだろう。そして、地球を野蛮な星と思い……」

こうなったからには、対策はただひとつ。なかったことにする以外ない。宇宙人なんか来なかったのだ。だれも円盤など見なかったのだ。爆発などなかったのだ。

あたり一帯が徹底的に調査され、破片がひとつ残さずしまつされ、放射能は中和され、事件のあとは完全に消される。さらに報道管制。このことが一般に知れたら、社会不安で大混乱が発生するだろう。

問題は目撃者たち。みな神経科の病院へと隔離される。暗示療法。あれは悪夢だったのだ、あなたの狂気の幻影だ、忘れるのです。そして、正常にもどりなさい。忘れるのです。

やがては最高責任者さえも、あれは幻覚だったという気分になってくる。

すべてが忘却のあなたに去ったころ、一台の円盤が飛来し着陸し、にこやかな宇宙人が出てきたとたん、それが爆発する……。

重要な任務

昼ちかく、ベッドで眠っていると、電話のベルが鳴った。受話器を耳に当てると、相手の声が言った。

「もしもし、聞こえますか」

おれは答えた。

「ちっとも聞こえねえな」

「それはいけません。すぐ耳の医者に行くべきです。一時間以内にどうぞ」

「わかったよ。そうするよ」

おれは起きあがる。頭のおかしい者どうしの会話ではない。これは合言葉であり、暗号なのだ。すなわち、一時間以内に本部へ出頭しろとの、上からの指令なのだ。

おれの属している“組織”は、公然たる存在ではないが、世界のあらゆるところまで根をはる強力なものだ。隠

然たる勢力というやつだ。これの一員になりたがるやつは多い。おれだってそうだった。

おれも加入できた時は、うれしく得意だった。他人に自慢するわけにはいかないが、大舟に乗ったみたい。そんな感じだった。しかし、しだいにその感激はうすれてきた。ずっと、たいした仕事をやらせてもらえなかったのだ。街頭での連絡係とか、つまらない見張りとか、緊張しつづけてぼんやりと立っているようなことばかりだった。

おれは昇進しなかった。“組織”の上のほうに進めれば、きつと楽しく、やりがいのある仕事があるにちがいない。陰謀と刺激と活気にみちた、なにかを感じる事ができるはずだ。

だが、どうすれば昇進できるのかわからなかった。つまらん雑用を失敗なくつづける以外にないのだろうか。そんな気分の日をすごしてきたのだが、それにもがまんしきれなくなったところだった。

そこへ、この電話だ。おれは胸がおどった。チャンスがめぐってきたようだ。本部へ出頭せよというからには、なにか大仕事をまかされるのだろう。よし、張り切つてやりとげてみせるぞ。

おれはひげをそり、身なりをととのえて外出し、本部に

むかった。本部はあるビルの地下室にある。地下室といっても、うすぐらく、しめった場所ではない。エアコンディション完備の、明るい照明の、広く豪華な部屋。

やがて、幹部がおれを呼び出した。さらに、もうひとりの男が呼び出されてそこに来た。おれと同様の、「組織」の下っぱなのだろう。あまり強そうでもなく、さほど優秀そうでもない。横目で見ると、緊張のためか少しふるえている。もつとも、そいつだっておれを見て、そう思っているかもしれない。

おれたちは机の前に立つ。幹部はゆっくりした、だが明瞭な口調で言った。

「きみたち二人に、重要な仕事をたのみたい。どうだ、やる気はあるか」

おれたちは同時に答えた。

「はい、自信はあります。『組織』のために、より大きくつくしたいと、いつも思いつづけてました。ぜひ、やらせて下さい。どんな仕事なのでしょう」

「その決意を聞いて、たのしく思う。きわめて重要な任務なのだ。すなわち、これなのだ」

幹部は壁にはめこんである金庫をあけ、なかから小さな包みを取り出し、机の上に置いた。派手な花もよりの紙に

包んであり、リボンでむすんである。香水かなんかの化粧品、ボンボン、アクセサリー、そんなものが入っている感じがした。しかし、おそらくそんな内容ではあるまい。わが「組織」に似つかわしくないからだ。おれたちは言った。

「それはなんで、どうするのですか」

「内容は言えない。極秘であり、重要そのものの品なのだ。で、きみたちへの命令だが、これをA国の支部へとどけてもらいたいというわけだ。確実にやりとげてもらわねばならぬ」

「わかりました。必ずやりとげます。取扱いの上で注意すべきことは……」

「決してなかをあけようとしなさいことだ。あける権利のあるのは、A国の支部の責任者だけだ。少しぐらいの衝撃でこわれるものではないが、ていねいに扱ってもらうに越したことはない。水のなかに落さないよう気をつけてくれ。この派手な包装が気になるかもしれないが、これはカムフラージュの手段だ。これだと、わが「組織」の重要物件が入っていると気づかれずにすむ」

「わかりました」

「途中で紛失しないようにたのむぞ。夜の睡眠は交代にし

て、見張ってもらいたい。そのため、きみたち二人を一組にして仕事を命じたのだ」

「はい。いかなることがあろうとも、A国の支部までとどけます」

「よし、では、すぐ出発してくれ。旅行に必要なものは、金銭をはじめ、すべてここに用意してある……」

幹部はA国支部の所在地や、そこでの合言葉を教えてくれた。また、途中からの連絡はしないよう注意した。他にかんづかれるものとなるからだそうだった。

かくして、おれたちは出発することになった。しかし、おれと同行する相棒は、あまりたよりにできそうな人物じゃなかった。おれだって、いばれたものじゃないが。だから、幹部は二人を一組にしたのかもしれない。

「まあ、よろしくたのむよ」

と相棒が言った。おれは包みをポケットに入れながら言った。

「ひとまず、おれが持つことにするよ。さてと、もう夕方だし、あすの飛行機に乗ることにし、きょうは空港のそばのホテルにとまるとするか」

「そうしよう」

おれたちは空港のそばのホテルについたわけだが、駐車

場の暗がりや、なにものかに襲われた。おれたちは背中に拳銃けんじゆうのようなものを突きつけられ、声を聞いた。

「おい、さわぐなよ。だまって、例のものを渡せ、さもないと……」

おれたちは、びっくりとして足をとめる。こいつらはなんなのだ。例のものなどと言っている。本部を出てから、あとをつけられたのだろうか。おれは平気をよそおって言った。

「人ちがいじゃないんですか。なんのことやら、心当たりがない。いったい、例のものって、なんのことです。ちゃんと品名をおっしゃらなければ、答えようがないでしょう」

「つべこべ言うな。例のものだけで、わかっているはずだ。われわれはすべてご存知なのだ。こっちは、この消音器つき拳銃の引金をひき、そのあとで取りあげることもできるんだぞ。そうしないのは、むだに血を流したくないからだ」

そう言われ、相棒はふるえ声で言った。

「こんなことで死にたくない。死んだらなにもかもおしまいだ。こいつらの言う通りにしよう」

「しようがない。例のものとやらを渡すよ。このカバンのなかだ」